

# 大国隆正における

## 国学四大人觀の形成過程

松浦光修

### はじめに

荷田春満・賀茂真淵・本居宣長・平田篤胤と統く学統に国学史は要約される、というような考え方がある。これを国学四大人觀といふ。厳密にいって、かかる見解が妥当なものか否か、今日では多少議論のあるところであるが、ともあれ、それが長く学界の通念となつてきたことは確かである。いittai、数ある国学者のなかで、春満・真淵・宣長・篤胤の四人を格別に尊重し重視するというのは、いつ頃からの習いなのであろうか。

村岡典嗣氏は、それについて次のように述べておられる。

そもそも国学四大人といふ考へ方は平田篤胤の学派に於いてはやく幕末にはじまつた。吾々はその最も顕著なる現れを平田篤胤の高門で後に一派の本学をたてた大国隆正（明治四年没八十歳）に求めうる。即ち彼が安政四年に著した学統弁論に述べたところがそれである。

『学統弁論』は、大国隆正が安政四年六十六歳の九月、三河国羽田八幡宮文庫の学舎で著した書で全一巻、短いものではあるがその重

要性は村岡氏の御指摘のとおりである。数多い隆正の著述のなかから、「日本思想大系」（岩波書店）に収録された三点のうちの一つかこの書であったのも、その国学思想史上に占める位置が高く評価されていたためであろう。

ところが、隆正の国学四大人觀がいかなる過程をへていつ頃成立したのか、詳しいことはほとんどわかつていよい。唯一の先行研究は芳賀登氏の「大国隆正の学問と思想—その社会的機能を中心として」<sup>(2)</sup>の『「四大人觀の形成と『学統弁論』』であるが、「天保の段階では、まだ国学（本学）の道統において春満・真淵・宣長・篤胤の四人を重視する四大人觀は成立していない。」という点以外に確実な論及はないようで、結論も「四大人觀の成立」は「かなりの年輩になつてからのこと」という漠然としたものに止まつてゐる。よつて、本稿では隆正の国学四大人觀の形成過程を、文献に則り、可能なかぎり正確かつ客観的に考察してゆきたい。そして、その作業を通じて、隆正の学問・思想の全体的な展開をも概略明らかにしてゆきたいと思う。

一

文政期、隆正がまだ二十歳代末から三十歳代末へかけての頃である。当時の国学界には立場の異なる学統觀が概ね二つ存在した。「契沖・真淵・宣長」とするのは、僧立綱撰、江沢講修増補の『三哲小伝』である。その序文には次のようにある。

いまの世にありて、高きいやしきいにしへのことわいため、  
石上ふるき書をよみ、敷しまのやまと心をはすかにもしる身と  
なりつるは、円珠庵のあさり、県居のうし、鈴屋のおきな、こ  
のみたりのいさをになむ。<sup>(3)</sup>

序文末の日付は「文政のはじめのとし」、つまり文政元年である。『国書総目録』によれば、文政元年・同八年・同十二年・天保二年・同三年・刊年不明と六種の版本が存在し、かなり流布したものであることが知られる。

これに対し、「春満・真淵・宣長」とするのは、平田篤胤の『改訂再版・毎朝神拝詞記』及びその注解書『玉釋』である。『改訂再版・毎朝神拝詞記』の「二十四 拝<sub>ニ</sub>古学神等<sub>ニ</sub>詞」の全文は次のとおりである。

辞別<sub>ニ</sub>、吾古学爾幸爾賜開正愈比奉留、八意兼神、忌部神、菅原神、又添<sub>ニ</sub>齋比奉留、荷田大人、岡部大人、本居大人、久延毘古命乃御前乎、慎美敬比、學問乃葉爾悟深久、弥莫爾莫賜比、足波不行<sub>ニ</sub>毛、天下乃事共令知賜弊止、畏美畏美母<sub>ニ</sub>奉留<sup>(4)</sup>、  
『玉釋』卷之九は、すべて右の神拝詞の注解にあてられてるのであるが、そのなかには『三哲小伝』に対する次のような批判も見ら

れる。

今世に古学と称して、歌道を立る徒、蟻の如く多かるに、其先生たちの伝を物するに、契沖、県居、鈴屋をし、三哲など称して、此大人の事をば、都に称する者なきは、其徒みな歌作者にて、道の本義を知ざる故に、歌学の方より然は思ふにぞ有ける。契沖は仏者にし有れば、然ても有なむ。県居、鈴屋の二翁をし、歌もて称せむは、其本意に違ふことなり。<sup>(6)</sup>

『改正再版・毎朝神拝詞記』は、もと文化十三年に『毎朝神拝詞』として出版されたものを大幅に改訂したものである。『毎朝神拝詞』には古学神への神拝詞は見えないから、『拝ニ古学神等ニ詞』は改稿の時新たに加筆されたものであろう。<sup>(7)</sup>その時期は、『大麿君御一代略記』文政七年の項に、「毎朝神拝詞ヲ増訂シテ、」とあるから、文政七年である。引用した文政十二年版は、改訂時の姿をよく示したものと思われる。そして、その文政七年の改訂の際、当然のことながら『玉釋』も大幅に改訂されている。『大麿君御一代略記』文政七年の項には、先に続けて、「玉釋ノ草稿ヲ改メ、第一ノ巻ヨリ、同ク九ノ巻マテ増補シテ、旧稿ヲ廢シ玉フ、」<sup>(9)</sup>とある。引用した九之巻の箇所も、その時か、それ以後のほどない頃かに記されたものであろう。いずれにしても、篤胤のかかる学統觀が文政期に成立していたことは確かである。

ただし、ここで留意しておかねばならないのは、『玉釋』の刊行の著しい遅れである。『氣吹舎日記』文政十一年十一月十七日の項には「玉たすき彫刻初め也。<sup>(10)</sup>」とあり、『大麿君御一代略記』天保三年の項には「玉須幾初帙刻成<sup>(11)</sup>」とあるものの、十巻すべてが

刊行されたのは明治二年になつてからのことである。<sup>(12)</sup> 一つの考え方が同時代にどれほど浸透したかを知る手掛かりの一つは、著述の流布情況であろう。『改正再版・毎朝神拝詞記』は当時さほど流布したものとは思われず、<sup>(13)</sup> また、学統觀にかかるのは「荷田大人、岡部大人、本居大人」の一箇所にすぎない。『玉樞』九之巻の刊行は、おそらく幕末になつてからのことであろう。<sup>(14)</sup> 一方の『三哲小伝』が文政初年より版を重ねたものであることはすでに述べた。両者を比較すれば、少なくとも文政期の国学界では、『三哲小伝』の説の方が一般的であり、『改正再版・毎朝神拝詞記』及び『玉樞』の説の方が一般的でなかつたことは否めない。したがつて、著述の流布情況の点からは、当時の隆正が前者の説を知つていたであろうということはいえても、同じように後者の説を知つていたであろうとはいえないものである。

ところが、『氣吹舎日記』文政十一年九月四日の項には「今井一造來」<sup>(15)</sup> とある。「今井一造」は当時の隆正の名であるから、これによつて文政期の隆正と篤胤とに一応の親交があつたこと、つまり隆正是篤胤の学説を直接知りうる状態にあつたことがわかる。要するに、文政期の隆正は双方の学統觀に接しうる環境にあつたといふことができるるのである。

さて、ここで二つの学統觀の性格を規定しておこう。『三哲小伝』が各伝の末尾に各人の和歌十首ずつを収めているところから、これが歌学書の系統に属するものであることは明らかであり、一方の『改訂再版・毎朝神拝詞記』及び『玉樞』が神學書の系統に属するものであることはいうまでもない。よつて、前者の「契沖・真淵

・宣長」を歌学的学統觀、後者の「春満・真淵・宣長」を神学的学統觀とする。後年の隆正の国学四大人觀は、後者を繼承し、それに主張者の篤胤を加えて発展させたものであることが明らかであるが、それでは、文政期の隆正の学統觀はどうのようなものであつたのか、次に検討してゆこう。

## 二

文政期以前の隆正の思想についての先行研究は、管見に及ぶかぎり皆無である。その原因は、おそらく史料的な制約にあつる。長く隆正研究の基本史料とされてきた『大国隆正全集』（以下、『全集』と略記す）に收められている成立年代の確かな著述のうち、天保五年のものが最も古いが、時に隆正是四十三歳、すでにその学問や思想もかなりの体系化を遂げつた頃である。したがつて、従来の『全集』にのみ頼りがちであった研究方法では、それ以前の二十歳代、三十歳代の隆正の学問や思想を直接的に明らかにすることは不可能であつたし、それは、思想家研究の要点である思想形成期が全く不明であつたということでもある。これは従来の隆正研究の大きな不備であった。それゆえ、隆正の全体像解明のためには、その基礎的な史料調査が不可欠の課題であつたといえよう。

『全集』未収の初期の著述類は、筆者が現在調査したかぎりでも五点は存在する。その書名、巻数、成立年代、所蔵機関などは次のとおりである。

(ア) 『柿本社奉納和歌集』一巻 文化十一年（二十三歳） 西尾市立図書館岩瀬文庫。

(1) 『わかくさ』一巻 文政二年（二十八歳） 東北大学附属図書館  
館狩野文庫。

(2) 『あめつちうたをつくれる解』一巻 文政四年（三十歳） 学習院大学図書館。

(2) 『詞のすみなは』一巻 文政七年（三十三歳） 九州大学附属中央図書館。

(4) 『矮屋一家言（得経談）』一巻 文政八年（三十四歳） 九州大学附属中央図書館他。

これらを詳しく検討してゆくと、およそ次のようないえる。

つまり、(2)の『詞のすみなは』以前の隆正は概ね宣長学の祖述の域を出ておらず、その学問や思想が独自の展開を見せはじめるのは(4)の『矮屋一家言（得経談）』以後、ということである。隆正の学統観が主体的に示されるようになるのも、同じく、この書以後である。

『矮屋一家言（得経談）』は版本で所々に伝わっているが、筆者が披見しえたかぎりにおいても、これには二種のものが存在する。

九州大学附属中央図書館所蔵本（以下、九大本と略記す）と神宮文庫所蔵本（以下、神宮本と略記す）とがそれである。九大本は首尾一貫しており特に問題はない。ところが、神宮本には、小は一語から大は半丁すべてに渡るまで、所々空白の部分が存在する。そして、これを九大本と比較してみると、明らかにその部分だけ版が削除されていることがわかる。また、神宮本にのみ見えるのはその序文だけであるが、文末の署名は「隆正」となっており、これは九大本序文の署名「今井中」に比すると新しい。以上の点よりして、九

大本が初版本であり、神宮本がその改訂本であることは明らかである。双方とも、序文の日付は「文政八年五月」と同じであるから、この点注意を要する。

それでは、初版本より二つの注目すべき箇所を引用し、これを(A)・(B)とし若干の検討を加えよう。

先ず、学統観に関してである。

(A) 言靈のみち久しく世にかくれてありしを、あらはるゝ時にあたりて、まへに円珠庵・県居・鈴屋の三師いでよほしをひらきおき、いま中にいたりてまた／＼あらはれいでたること。しかししながら中がちからにあらず。すべて造化の機関にしてまた三師の功なり。

隆正是自らの学問の先達として「円珠庵・県居・鈴屋の三師」をいふのであるが、これは「円珠庵のあさり、県居のうし、鈴屋のおきな」をいう『三哲小伝』と人名の表記法からして同じであることに気付く。当時の隆正が歎美的学統観を継承していたことは、ここに一目瞭然である。

次に、その背景である学問・思想に関してである。

(B) ついでなればいふ。神代卷は和学者のたてとしていふものなれど、中が智いまだとよかず。このゆゑにさしおきてとかず。／＼そのことばをときてそのゆゑよしをとかず。中はすべてわがこゝろにおちぬことはとかず／＼（△▽内割注）

これは、「自家神道の主張者たるを本領とした」隆正、というような、今日までの学界の通念からすればかなり意外な史料といえる。隆正自身が、記紀の「神代卷」が「こゝろにおちぬ」と、つまり

「神代卷」の語句は理解できてもその精神が理解できないと、正直に告白しているからである。よつて、少なくともこの文政八年四十歳以前の隆正の学問・思想が神道を中心としたものではなかったこと、また、その学問・思想が神道を中心としたものへ変化するのとはこれ以後であること、これらは確かである。従来、全く知られていなかつたことであるが、この時期までの隆正は歌学的国学、「和学」といつても「歌よみの学問」といつてもよいが、そうした傾向の学問を専一していたのである。<sup>(18)</sup>『三哲小伝』的な歌学的学統観の継承も、かかる学問傾向が必然的に然らしめるところであつたろう。

ところで、神宮本には(B)が削除されている。隆正に「神代卷」が「ここにおち」る時が来たのである。ただし、(A)はそのまま残されている。ということは、「神代卷」の精神的理解は進みつつ、同時に歌学的学統観も維持された時期が存在し、その時に『矮屋一家言(得経談)』の改訂が行われた、ということになる。おそらく、次に検討する天保五年頃がそれに相当する。

### 三

天保五年、隆正是四十三歳である。奥書に、「天保五年五月三十日 大坂のたびのやどりにて 野之口隆正書之」(四／二六五)『全集』第四卷二六五頁を意味する。以下、これに準ず」と記された『通略延約弁』には次のようにある。

近き世にいたりて契沖法師・岡部真淵・北辺成章・本居宣長・本居春庭、この人々ぞよく古言をばときける。(中略)この五

人の功、古今に比類なくまことにたふとし、世の人、今にして古言をしり、これをとき、これをつかふは、この五人のかげになんよりける。しかはあれど、古言の宗これにてことつきたりとおもふはたがへり。いといひにくきことにはあれど、この五人の説は、このみちのはじめをなせるまでにて、隆正が眼より見れば、いまだしきことおほかり。(四／二四一—二)

また、序文の日付「天保五年十月」(五／三六一)の『うた日記』には、『古今集』序文に関する通説を批判した後に、さるを世々の歌学者たち其説にひかれ、ちかき世に名たかき契沖法師・岡部真淵・本居宣長その外の大人们も、みなその説にくらまされて、仮名序のところをとかれたるは、あかぬことなり。(五／三六八)

とある。先行の学者や学説への批判的な姿勢が目立つものの、隆正の学統観は、依然として歌学的な傾向を示している。一方、「天保五年、なにはに來ぬるはじめのほど、とひくる人もなく、とひゆくいへもなく、よむべきふみもなく、つれぬくなるあまり、たはぶれにかけるさうしなり。」(一／二九四)という『鼻くらべのさうし』には次のようにある。

天地のはじめ國之常立神といふ神靈〔割注〕人にあらず、靈氣なり。「おはしまして、万國の坐位をさめたまへるに、日本を三千度より四十度のあひだにおきたまへり。〔割注〕神書要領・神代卷校異伝等にくはしくいふべし。」(一／二八四)『神書要領』・『神代卷校異伝』という書については、現在のことら、はたしてそれが出来たのかどうかさえ不明であるが、この天

保五年の時点で、「神代卷」に関する個別の著述がかなり具体的に計画されていたことは、当時の著述目録などによつても知られる。<sup>(19)</sup> 隆正の神学研究は、すでに大きく述べて進展していたのである。

学統觀が各時期の學問傾向の端的な表現であるとすれば、かかる神学研究の進展は、自然、從來の學統觀の変化を伴おう。天保七年の『憐駁者』には、江戸初期の儒学の興隆が記された後に、

その中にまじはりて、皇国學といふものおこれり。長流・契沖はなにはにありて歌学をいにしへにかへし、春満・真淵は歌学のみにとどまらず、儒仏習合の神道をあらためて、皇国純粹の神道をおこさんとはかりたり。本居翁そのこころさしをうけつぎて、この正大の道をおこせり。<sup>(20) (二二五八)</sup>

とある。これは、從来の歌学的學統觀と、新たに認識された神学的學統觀との折衷形態と見ることができる。

こうして、隆正の學統觀は、明らかに國學四大人觀の成立へと歩を進めたわけであるが、そこにはまだ重要な問題が残されている。それは、平田篤胤の評価である。この時期の文獻を整理して、當時の隆正が、先行の國学者の誰をどの程度意識していたかを総括してみよう。

書名	人名	契沖	荷田春満	賀茂真淵	本居宣長	平田篤胤
通略延約弁(天保五)		1				
うた日記(天保五)	0	0	0	6		
鼻くらべの(天保五)	0	0	0	2		
さうし(天保五)	5	3	0	0		
	4	0	0	0		
	0	0	0	0		

憐駁者 (天保七)		%	計	
ことばの(二二)	1	10	5	1
まさみち(天保七)	0	2	1	0
		33	17	3
		56	29	2
		0	0	0
				18

右は、成立年代の明らかな、天保五年から七年までのすべての著述における契沖及び四大人の人名の頻度を統計したものである。<sup>(21)</sup> これに特徴的な点は、第一に、篤胤の春満重視・契沖軽視とは全く逆の傾向が見られること、第二に、全体的には真淵・宣長が中心的位置を占めること、第三に、篤胤の名が一切現れないこと、などである。また、正確な成立年代は不明であるが、この頃のものには相違ない『神道みちしるべ』には、次のような學統表が記されている。



「和学」は、「神道」と「歌道」とに分されており、当時の隆正の學問傾向を反映しているが、「神道」の「本居流」の下に「平田流」、とはないのである。

後年、隆正は宣長の跡を継ぐ人傑として篤胤を賞揚し、さらに、

自らをその跡を繼ぐ者と主張するに至るのであるが、少なくとも、篤胤の学問が宣長学の繼承・発展を意識して出発したのと同じよう、隆正の学問が篤胤学の繼承・発展を意識して出発したのではないことが、ここに確かとなる。とすれば、隆正の国学四大人觀と学問・思想との成立に関して、残る問題は篤胤評価の一点に絞られてこよう。

## 四

隆正と篤胤との間に親交があつたことは、先に『氣吹台日記』によつて実証した。それにもかかわらず、天保七年までの著述に篤胤の名が一度もあらわれないのはどうしたことだろう。そこには、複雑な問題がいろいろと存在するようであるが、その主な原因の一つと思われるが、篤胤とその学問とに対する隆正の不信である。晩年、隆正は往時を回想してこう述べている。

そのころより神典をあきらめんといふこゝろざしをおこしたりけれど、平田先生にいたしくゆきて学ぶとともに、みづから倭書をよみてありけるは、そのころ、平田先生をあしさまにいふもの多く、<sup>23</sup>おのれも儒見いまだのぞこらずして、うたがふ事おほかればなり。

かかる疑念が完全に払拭されないかぎり、国学四大人觀は無論のこと、後の隆正学も成立し難いであろう。いつたい、隆正の篤胤認識に変化が起つたのは、いつなのであろうか。『全集』における成立年代の明らかな著述は、天保七年のものから一挙に嘉永年間のものへと飛んでおり、その頃にはすでに国学四大人觀が成立しているた

めに、『全集』だけではその間の経緯を知ることはできない。よつて、再び『全集』未収の史料の調査が必要となる。

管見に及んだかぎりでいえば、隆正の篤胤評価は、序文の日付「天保十一年八月」の『神字小考並考余』に始まる。その冒頭には次のようにある。

平田先生古史開題記に、神代吾邦にはやく神字のありし事を論し、又旧く世に伝はれる神代文字といふもの異本十三文をあつめて校正し、神字日文伝といふ書をあらはされたり。隆正江戸にありし時、その書を見て、よくもよまで、そのころは古語拾遺にこゝろひかれてありしかば、信ずる心うすく、わが古言はまたく五十の正音を用ひたりしことなるに四十七言なるはこゝろえず、い・う・えの三音をいひ失へる後のつくりごとなるべく、かつその体の朝鮮の諺文に似たるもこゝろよからず、いづかたにつけても上つ代のものにてはあらじとおもひ貶しておりしを、このころ又ある人の、写しもたる日文伝を見て、このたびはよくよみあぢはへて、よく考ふるにその四十七字いつはれるものにはあらざりけり。

ほかにも何らかの経緯があつてのことかどうか、それはわからないが、少なくともこの史料によるかぎり、篤胤の『神字日文伝』を再読したことが篤胤評価の直接の契機であつたといえる。そして、同書には右の文に関して、次のよくな頭注がある。

今おもへは平田翁は宇宙未曾有人傑なり。おのれ江戸にありしきは、其皮膚を見て、まだ其骨髓をしらざりけり。わがこゝろの鈍き故とはいひながら、親炙してだに然ありしものを、

その著述をよくもよまでそしる人の多かるはこゝらうきことなり。この頃が隆正の篤胤評価の開始期であることは、右の一文によつてもほぼ間違ひのないところと思われる。時に、隆正四十九歳、篤胤六十五歳である。

以後の隆正の著述において、篤胤は宣長と併称される存在となつてゐる。冒頭に、「弘化・嘉永の今時をもて」（五／三一七）とあるところから、弘化四年から嘉永元年へかけてのものと見られる『死後安心録』には、

又、本居・平田氏の著述によりて神道にこころざしをたてなほす人、武家・在町ともにかれこれいできたり。（五／三一八）

とある。

さて、現在の段階で、最も早く隆正の国学四大人觀の成立を確認できる記事は、『やまとごころ』という著述のなかにあるのであるが、その成立年代に關する從來の見解には再検討の必要がある。隆正伝の基本資料である『維新前後・津和野藩士奉公事蹟』卷之上の嘉永元年の項には、「適隆正倭魂と題する書を著し、之を阿部侯に呈覽す。」とあり、これまでの研究のほとんどが、この『倭魂』と『全集』所収の『やまとごころ』とを同一の書と見なしてきた。ところが、『全集』には『やまとごころ・異本』も收められており、どちらが嘉永元年のものなのか不明である。つまり、それぞれの成立年代について正確なことはわかつていないのである。ということは、『やまとごころ』を即嘉永元年の『倭魂』と見なすことはできないということであり、この点、從來の研究は慎重を欠いていたと

いわざるをえない。このような文献批判の不徹底が、從來の思想史研究においてはよく見受けられるが、少なくとも本稿では、可能なかぎり成立年代の確かな文献によつて思想の展開を押えてきたわけであるから、この『やまとごころ』についても、奥書などで成立年代の確かなものを底本としたい。

現在、管見に及んだかぎりでは、「参河國羽田八幡宮文庫」の印をもつ版本が最も古い。<sup>25</sup> 題簽は「夜麻登許々呂」、内容は『全集』の『やまとごころ』一と同じである。版本自体に日付はないが、次のような奥書が存在する。

此一巻は、同学森田光比呂が野々口主の許をとひつる時、おのがもとへおくりおこさせたるなり。

嘉永三年庚戌五月

羽田野敬雄<sup>(26)</sup>（花押）

つまり、この刊行不明の版本は隆正から森田光比呂、光比呂から羽田野敬雄へと渡り、敬雄の羽田文庫へ收められたのが嘉永三年五月というわけである。そのなかに、次のような箇所がある。

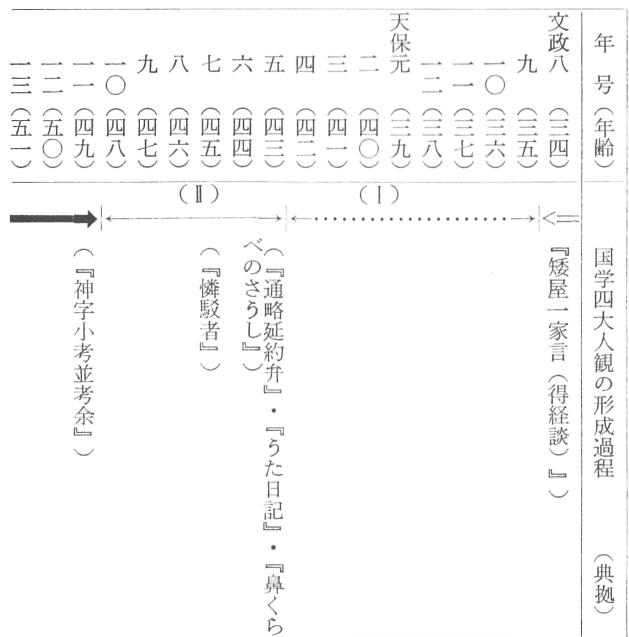
黄門光国卿出世したまひて、神道を本にたて儒を扶翼とし、仏を斥くる學風のおこりしも時運なり。さしつぎに春滿・真淵・知一とのたまへる神國一世無窮之玄妙を窺ひ知る學術のおこりしも時運なり。隆正もこの時運に役使せられて、これらの書をもあらはすなり。

よつて、隆正の国学四大人觀の成立は嘉永三年五月以前である。そして、それが神学的學統觀であることは右に明らかであるから、こ

の頃には、今日よく知られている神道学者としての隆正も、すでに誕生していたと見て差し支えなかろう。

### おわりに

以上、考察し来つたところをまとめると次のようになる。



先ず、文政八年以前は歌学的国学に立脚して歌学的学統觀が示され、嘉永三年以後は神学的学統觀である国学四大人觀が示されているので、この間を広義の形成期とする。次に、それを「神代卷」研究と篤胤評価との顯在化の時点をもって三分し、(I期・II期・III期)とする。結論として、(I期八年の間に本格的な神学研究が開始され、(II期六年の間は歌学・神学並立の過渡期であり、(III期十年の間に国学四大人觀が成立した、ということができる。これは、今後さらに精度を高めてゆくことも可能であろうが、今はこれで筆を置き、もって識者の批判を仰ぎたいと思う。

なお、『学統弁論』の成立、隆正初期の著述、隆正と篤胤との関係などについては、あらためて別稿に論ずる予定である。

### 注

- (1) 村岡典嗣氏著『宣長と篤胤』(創文社・昭和三十二年刊)  
三頁。
- (2) 「日本思想大系五〇『平田篤胤 伴信友 大国隆正』」(岩

波書店・昭和四八年刊)所収。

(3) 刈谷市立刈谷図書館所蔵・版本(刊年不明)。

(4) 神宮文庫所蔵・版本(文政十二年刊)。

(5) 春満をいう。

(6) 『新修平田篤胤全集』第六巻(名著出版・昭和五十二年刊)四八八頁(原文割注)。

(7) 渡辺寛氏「平田篤胤の毎朝神拝詞記」(『高原先生喜寿記念・皇学論集』[皇學館大學出版部・昭和四十四年刊])所収、「平田篤胤の毎朝神拝詞記・追補」(『神道史研究』第十九卷第一号・昭和四十六年)参考。

(8) 前掲『新修平田篤胤全集』第六巻六一一頁。

(9) 同右。

(10) 渡辺金造氏著『平田篤胤研究』(六甲書房・昭和十七年刊)一〇五七頁。

(11) 前掲『新修平田篤胤全集』第六巻六一四頁。

(12) 山田孝雄氏「(玉櫻)解題」(前掲『新修平田篤胤全集』第六巻所収)参考。

(13) 前掲「平田篤胤の毎朝神拝詞記」、「平田篤胤の毎朝神拝詞記・追補」参考。

(14) 前掲「(玉櫻)解題」参考。

(15) 前掲『平田篤胤研究』一〇四七頁。

(16) 野村伝四郎氏編(有光社・昭和十一四年刊)全七巻。

(17) 村岡典嗣氏著『神道史』(創文社・昭和三十一年刊)一五三頁。

(18) 嘉永六年(六十二歳)の『文武虛実論』には、「隆正をさ

なかりけるときよりいかで日本國の古道をあきらめて、天地の真をしらんとおもこころさをおこしたれど一度は嚮に迷ひ、普通の和学にうつり、つひにもとの心さしをとげて、造化の真を得たり。」(『全集』第一巻三八頁)とある。

(19) 「野之口隆正著述書目」(『鼻くらべのさうし』神宮文庫所蔵・版本(天保五年の初版本と思われる)付録)には、『神道受用考証』・『神道四靈考』・『三道三欲昇降図』・『心昇降図説』・『幽冥備考』・『三道三欲昇降図』・『神道三靈圖』・『みちのなかうた』・『神典窮理説』・『神代校異伝』・『神代校異伝講義』・『神代幽契談』などの書名が見える。

(20) 「憐駁者」の成立年代は『維新前後・津和野藩士奉公事蹟』卷之上によった。

(21) 「ことばのまさみち」の序文末には、「天保七年八月 野之口隆正するす」(四三四〇)とある。

(22) 作製にあたっては、引用文は対象外とし、「本居宣翁」・「宣長翁」などはすべて「本居宣長」に換算し、他の人名もこれに準じた。なお、ペーセンテージは少数点以下四捨五入とし

(23) 前掲「日本思想大系五〇」(『学統弁論』)四七八一九頁。

(24) 国学院大学図書館所蔵・版本(刊年不明)。なお、本書と『神字原』とは同一内容のものである。

(25) 豊橋市立図書館所蔵。

(26) 三河国渥美郡羽田村の神明社及び八幡宮の神主、文政十年

平田篤胤へ入門している。八幡宮境内に設立した「三河国羽田八幡宮文庫」は有名。明治十五年、八十五歳で没している。

(27) 森田光尋のことであろう。光尋は三河国渥美郡牟呂村の八幡宮の神主、嘉永二年（二十五歳）に平田門人となつている。

(28) 『菅家遺誠』をいう。

付記 本稿は、日本思想史学会昭和五十九年度大会（東北大学）

における同題の研究発表草稿を、増補訂正したものである。